論文審査の結果の要旨　　課程博士論文　『ジャック・デリダにおける生産の概念』

小森謙一郎　（言語情報科学）

小森謙一郎氏の課程博士論文は、現代フランスの哲学者・思想家であるジャック・デリダにおける「生産の概念」を主題としたものである。デリダにおいて、これまであまり取り上げられることのなかった「生産」というコンセプトが、この思想家の思索のなかで実は長い間大きなテーマであったことを論証することを目指している。

本論文は三部構成となっており、第一部では、アルチュセール、およびマルクスにおける「生産」の概念を検討している。人間による〈自然の固有化・我有化〉というマルクス主義的な「生産の概念」に対し、デリダは基本的に違和感をもっていたこと、もっと別の生産の概念を練り上げる必要を感じていたことを、本論文はいくつかの論考に即して考察している。第二部では、カント『判断力批判』（第一部「美的判断の批判」）における「生産の概念」を、デリダがどのように批判的に捉えたかを検討している。カントは根本的には自然に対する芸術の優位を主張しているのだが、しかし（芸術における）自発的で、能動的な「生産的構想力」という理念（「再生産的構想力」とは異なる構想力の理念）を重視する過程で、真の創造性は「所産的な自然」をまねるのではなく、「能産的な自然」、「産み出す自然」の創造性そのものを模倣するのであると考える。この思考法によれば、真に創造的である芸術家は「天才」であり、そういう天才は「自然の賜り物、自然の贈与」であって、産み出す自然の能産性を体現している。こういう真に創造的な天才（自然の能産性そのもの）を背後から支え、保証しているのは、〈神〉の創造性であり、〈神〉の真正なる能動性、能産性である。こうしてカントの「生産的構想力」という理念、それに基づく芸術哲学のうちには、人間存在を神的な存在によって支え、存立させる神学的存在論が必然的に内包されている。

本論文の見方では、デリダはこうした存在論‐神学的な「生産の概念」を批判するモチーフを、初期の『グラマトロジーについて』から一貫してもっており、デリダの批判はカントの芸術哲学のみならず、ヘーゲルの『美学講義』における存在論‐神学的な産出の観念にも向かっている。その批判の射程は、ヘーゲルを継承しているマルクス主義的な「生産の概念」にも及んでいるというのが、本論文の主張である。

第三部では、デリダが存在論‐神学的な「生産の概念」を批判するとき、その基盤となっているのはデリダ的なエクリチュール（書き込み、記載、文字的な次元の先行的形成）およびテクスト（言語の織物、言葉による書くこと、書かれたもの）の理論であることを、「マラルメ論、二重の会」（『散種』）を読解しながら検討している。言語的なものは自然ではなく、実体的なものでもない。根本的なテクネー（アート、芸術）であり、いわゆる自然と文化との区別・分離に先行しており、こういう区別・分離を可能にしている。通念では、文化・芸術はあらかじめそれとして存在している自然を模倣すること（ただし神のような真の創造性をもつ能産的な自然を模倣

すること）で成り立っているのであるが、テクスト（言語の織物）を書くことは、初めから決まっている参照項をもたず、ア・プリオリに確定している対象を指し示すことはない。書くことと同時にしか参照項や対象は産み出されない。こうしたテクストの産出とともに産み出される〈意味〉は、書く主体（作者）のものだけではなく、読む者たちによって分有され、独自な仕方で受け継がれていくのであり、けっして作者のもとに戻ってしまうことがない。再固有化されてしまうことはない。テクストは存在論 - 神学的な生産とはならない。作者（神）による真の創造や生産ではなく、多数の関係性のなかでのみ創造や生産は考えられるのである。本論文は、デリダによるテクスト生産の思想をこのように理解することで、それが伝統的な生産の概念の批判になっていると主張している。

本論文は、『エコノミメーシス』や『ヘーゲルの記号学への序論』、『絵画のおける真理』、「マラルメ論、二重の会」（『散種』）など多くのデリダのテクストを読解しつつ、デリダによる「伝統的な生産の概念の批判」を詳細に考察したものであり、これまで行なわれてこなかった分野を埋める作業となっている。伝統的な生産の概念とは異なって、テクスト的な生産は言語的なものの本性にあくまで忠実な運動であって、存在論 - 神学的な生産とはならないこと、テクスト的生産や創造は、作者（神のような作者）による「真に能産的な」創造や生産ではなく、多数で多様な「痕跡的しるしの関係性」のなかでのみ考えられることを、多くの例を引きながら論証している。

ただし、本論文には、不十分な点もある。まずカントの芸術論をかなり図式的に存在論 - 神学的な生産の概念へと限定していることである。もっと細部を読み取り、デリダがそうした細部まで考慮に入れつつ論じていることを明らかにすべきであっただろう。またマルクス主義的な「生産の概念」に対するデリダの批判に関しては、問題が大き過ぎるためもあって、十分に説得力のある議論を展開できているとは言えない。さらにテクスト理論を根底から支えているデリダの独自の言語論、すなわち原エクリユール（先行的な書き込み、痕跡的しるしの記載、音声言語を可能にしている原-痕跡的なもの）という議論を、もっと丁寧に説明する必要があったであろう。

こうした不十分な点はあるものの、本論文は現代哲学の重要な思想家のある一つの面（伝統的な生産の概念の批判という面）を丹念に追求しており、一つの貢献をなしていると判断される。ゆえに博士（学術）に値すると認められる。